

総務委員会

日 時 (令和7年)	6月25日～6月27日(3日間)	
調査都市	岡山市 北九州市 熊本市	
視 察 参 加 者	委員長 副委員長 委員	小須田 大 拓 おんむら健太郎 高 橋 克 朋 こじま ゆ み 伴 良 隆 中 村 たけし 森 基誉則 丸 山 秀 樹 坂 元みちたか 成 田 祐 樹
	随行書記	羽 石 龍 馬 中 村 勇 太
調査項目	1 歩きたくなるまちづくりについて 2 脱炭素に向けた取組について	

岡 山 市

【ハレまち通り歩いて楽しい道路空間創出事業について】

1 事業の背景と課題

岡山市中心市街地は、岡山城中心の歴史的商業地とJR岡山駅中心の近代商業地の二核を持つ。約10年前に大型ショッピングモールが開業したこと等により、駅前への集客が集中し、他商業エリアへの回遊性低下が懸念された。

また、全国同様に人口減少・少子高齢化が進み、「都市のスポンジ化」（低・未利用地の増加）が進行。既存社会基盤の有効活用が喫緊の課題であった。

再整備前のハレまち通り（旧県庁通り）は、車道中心の2車線一方通行で、街路樹は老朽化し木陰が少なく、歩道は継ぎはぎや段差が多く、車椅子・ベビーカー利用者には歩きにくい状況であった。

2 事業概要

- ・対象区間：ハレまち通り（旧：県庁通り、市役所筋～柳川筋）
約0.6km.
- ・事業期間（ハード整備）：令和2年1月～令和4年3月
- ・総事業費：約10億円

3 事業内容

(1) ハード整備（魅力的な道路空間の創出）

ア デザインコンセプト

- ・賑わい創出のために“活用”できる空間
- ・ハレまち通りの都会的なイメージを体現
- ・沿道の店舗や活動する人が主役となれるよう落ち着きがあり、親しみの持てる空間
- ・安心・安全に活動できる空間

イ 整備内容

- ・車道の1車線化と歩道の拡幅
→2車線だった車道を1車線化することで、歩道が大幅に拡幅。
車両の速度抑制を促すため、車線はあえてスラローム状にデザイン。
- ・自転車通行空間の整備
→拡幅した歩道に自転車専用レーンを設置し、歩行者と自転車の分離を図った。
- ・ベンチの設置
→歩道にテーブル付きのベンチを配置し、通行者の休憩スペースを整備。
- ・連続照明の設置
→夜間の安全確保と良好な景観創出のため、デザイン性の高い連続照明（電球色）を90本以上設置。



小須田 大拓 委員長



おんむら健太郎 副委員長



整備前



整備後

岡 山 市

(2) ソフト施策（官民連携による賑わい創出）

【社会実験（1M KENCHO-DORI PROJECT）】

歩道空間（民地から1mの部分）を沿道の店舗がオープンカフェや商品陳列などで活用する社会実験を1週間限定で実施した。この実験は好評で、実際に空き店舗に入居した飲食店もあり、官民が一体となった賑わい創出の可能性を示す結果となった。

また、社会実験で得られた知見をもとに、沿道店舗が歩道空間の一部をオープンカフェや商品の陳列棚などの設置に活用できる仕組みを構築した。



【社会実験（県庁通り回遊性向上社会実験）】

事業開始当初、2車線から1車線化への移行には交通渋滞への懸念から強い反対意見があった。岡山市は、2年間かけて実際の道路空間で社会実験を実施し、交通量や渋滞に問題がないことを客観的なデータで示し、関係者の理解を深めることに成功した。



【県庁通りデザインミーティング】

社会実験後もまちづくりフォーラムや「県庁通りデザインミーティング」（公開会議、講演会、ワークショップ、マーケット開催など）を継続的に開催し、沿道事業者や地域住民と将来ビジョンを共有した。

これにより、事業者側も自分たちにとってのメリットを理解し、行政との連携へ意識が変化した。外部の専門家であるコンサルティングの協力も得ながら、専門知識と地域意見を融合させたデザイン策定が行われた。



高橋 克朋 委員

4 事業効果について

中心市街地の回遊性向上

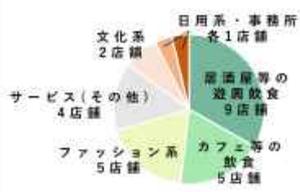
休日の歩行者通行量が**約1.4倍**増加



- 平日(8:00～19:00)の歩行者通行量も、**約1.3倍**増加し、まちの活性化に繋がった。

魅力的な都市空間の創出

沿道(1F)に**27店舗**の新規出店



- 27店舗(全体の3割)の新規出店(店舗の入れ替わり含む)のほか、3棟の建物更新等、**民間投資の促進**。
- 沿道まちづくり組織の発足や、賑わい創出の取組が実施されるなど、**まちづくり組織等の活動を促進**。

車中心から人優先の歩いて楽しいまちづくりの推進

約8割が再整備に肯定的な回答



- ハレまち通りの再整備について**約8割**が「よい」と回答する等、市民等に「**車中心から人優先の歩いて楽しいまちづくり**」の取組への理解が深まった。

岡 山 市

5 今後の課題について

(1) 歩道活用制度の利用促進

制度上は歩道空間の活用が可能なものの、令和5年度時点で実際に活用している店舗は80店舗中わずか5店舗で、日常的にオープンカフェを行っているのは2店舗にとどまっている。

(2) 沿道建物の老朽化

沿道には古い建物が多く、歩道空間を活用しても店舗前のスペースが限られてしまっている。建物の更新時に壁面を後退させるセットバックなどを進め、民地側と歩道空間が一体的に活用されるような長期的視点での取組が必要。

(3) 自転車通行の安全性

歩行者・自転車利用者が、通行車両との距離が近いなど危険とを感じる場面がある。

歩行者・自転車利用者と自動車ドライバー双方への安全運転やマナー向上の啓発活動が継続的に必要。

(4) 賑わい創出の持続性

行政が主導するのではなく、今後は沿道事業者などの地域住民による主体的なまちづくり活動が展開されることが重要。岡山市としては、金銭的な補助よりも規制緩和などによって、持続的な支援を行えるよう検討している。

現在は、マルシェなどを定期的に開催し、将来的に常時活動してくれる事業者を呼び込むための実証実験を行っている。



こじま ゆみ 委員



伴 良隆 委員

<委員からの主な質問と回答>

Q:車線を1車線にするにあたり、交通関係は市の所管ではなく県の所管となるが、どのように協議を進めていったのか。

A:岡山県警との協議が非常に難航した。地域が不安に思っている状態では認められないという指摘があり、まず地域の不安を取り除く必要があった。最初は取り合ってもらえなかったが、地域の方々と一緒になって事業を進める動きが出始めてから、県警ともうまく協議が進んだ。

Q:他の通りから同様に整備してほしいという要望は出なかったのか。

A:他の通りから同様の要望は出ておらず、次にどこかを整備するという路線もまだない状態である。

Q:1車線化によって、配送や荷捌きにマイナスは出なかったか。

A:配送関係の業者からは、再整備前の不安の声が多かったが、社会実験の段階から配送車両の停車スペースを確保するなど配慮することで、業務に支障がないことを確認した。再整備後も各区分ごとに駐車スペースを設けることで対応している。

Q:岡山市として、ハレまち通りの将来的なビジョンをどのように考えているのか。

A:ハレまち通りを商店街にしようとは考えておらず、多様な考えを持つ人々が立地し、通りに対して愛着と誇りを持ってもらうことを期待している。行政としては、通り全体におけるデザイン面や景観面の統一性は必要だと考えており、その整備は継続していく。

北九州市

【脱炭素に向けた取組について】

1 北九州グリーン成長戦略について

(1) 背景

北九州市の温室効果ガス排出量は、全国平均（32%）と比較して、産業部門の割合が59%と極めて高いことが特徴である。（2021年時点）

そこで、2050年のゼロカーボンシティ実現に向け、「エネルギーの脱炭素化」と「イノベーションの推進」を軸とした戦略を2022年2月に策定した。

2030年度までに2013年度比で温室効果ガス47%以上削減を目指し、約5,900億～6,800億円の直接投資と約93万トンのCO2削減効果を見込んでいる。

(2) 戦略の意義

◆目的（ミッション）

脱炭素という経済活動のルールチェンジの中で産業の競争力と都市の魅力を高める

◆目指すべき姿（ビジョン）

環境と経済の好循環による「2050年ゼロカーボンシティ」

◆行動指針（バリュー：3つのC）

①成長に向けた挑戦 (Challenge)

脱炭素に伴う経済活動のルールチェンジを新たな成長の機会と捉えて、積極的に挑戦

②産学官の協働 (Cooperation)

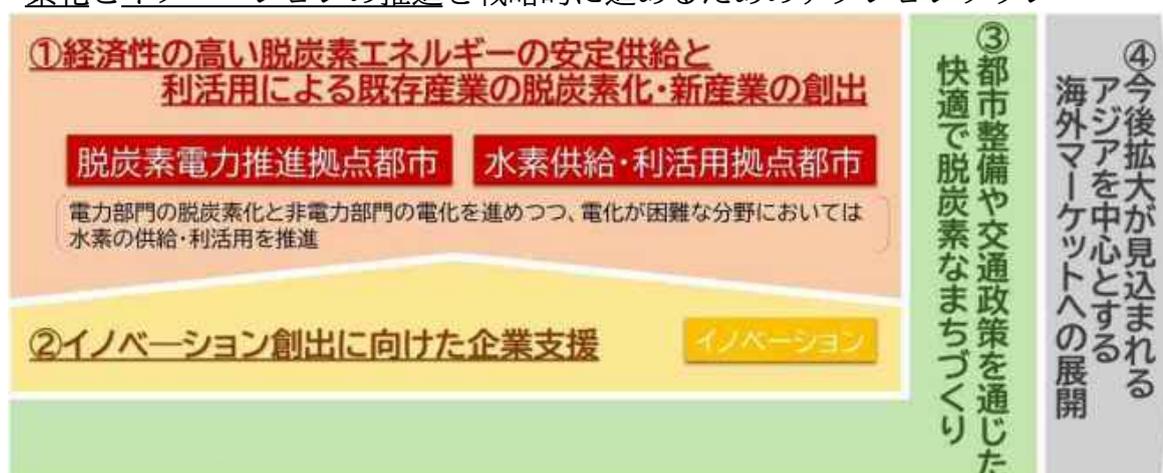
戦略的な産官学の連携や地域間連携により、地域のあらゆる資源を産業の発展に必要なイノベーション創出や人材育成の源泉に変換

③サーキュラー・エコノミー (Circular economy)

サーキュラー・エコノミーのビジネスモデルとDXを活用して、ビジネスモデルを変革し、新たな価値を創出

(2) 基本戦略

- ・「環境と経済の好循環」による2050年ゼロカーボンシティに向けて、エネルギーの脱炭素化とイノベーションの推進を戦略的に進めるためのアクションプラン



(3) 脱炭素エネルギーの供給・利活用に向けた2つの柱

ア 脱炭素電力推進拠点都市

地域のポテンシャルを最大限に活かし、安価で安定した脱炭素電力を供給する体制の構築を目指す。

- ①洋上風力発電：響灘地区に西日本唯一の基地港湾が指定されている強みを活かし、風車関連産業（メンテナンス、組み立て等）の総合拠点化を進めている。

北九州市

- ②太陽光発電の拡大：第三者所有方式（PPA）を活用し、公共施設や民間施設への導入を加速させる。
- ③資源循環産業：北九州エコタウンの強みを活かし、大量廃棄が見込まれる太陽光パネルや蓄電池のリユース・リサイクル産業を創出する。

イ 水素供給・利活用拠点都市

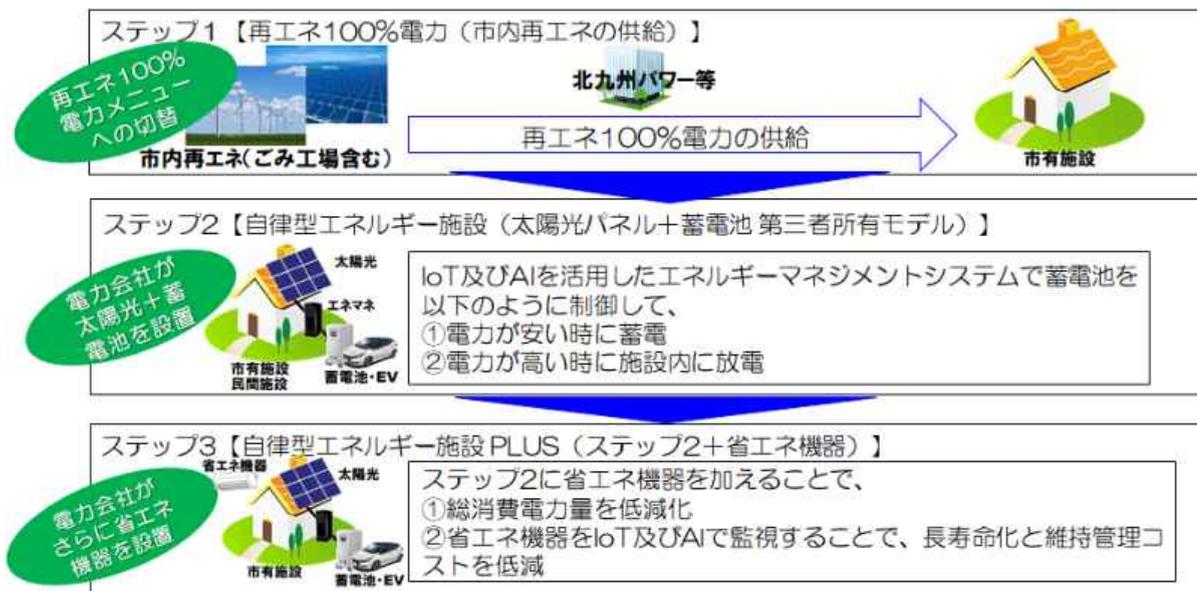
北部九州を含めた水素の供給拠点となるとともに、エネルギー転換の推進による水素の需要拡大を目指している。

- ①水素供給インフラ：八幡東区東田地区の「北九州水素タウン」にて、1.2kmのパイプラインによる実証を進め、将来的には大規模な輸入拠点の形成を目指す。
- ②メタネーション：水素と回収したCO2から合成メタンを製造し、既存の都市ガス導管で供給する実証事業を民間企業と共同で実施している。
- ③ゼロカーボン物流：長距離輸送用のFC（燃料電池）トラックや、水素燃料船の導入に向けた検討・実証を推進している。

2 再エネ100%北九州モデルについて

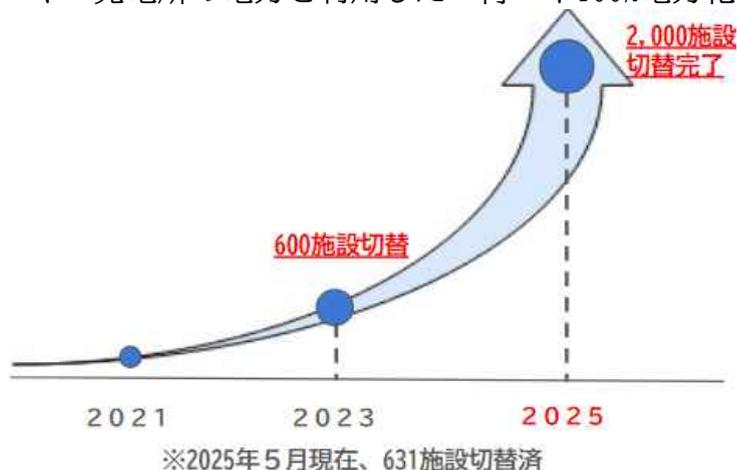
(1) 概要

- ・再エネを100%自家調達していくための模範的なロードマップ



(2) 目標

- ・2025年度までに、市内にある約2,000の公共施設すべてにおいて、市内の再生可能エネルギー発電所の電力を利用した「再エネ100%電力化」の達成を目指している。



北九州市

(3) 取組事例

ア 地域新電力による再エネの地産地消

市が出資する「株式会社北九州パワー」が中核となり、地域電力を地域で使う「地産地消」の仕組みを支えている。

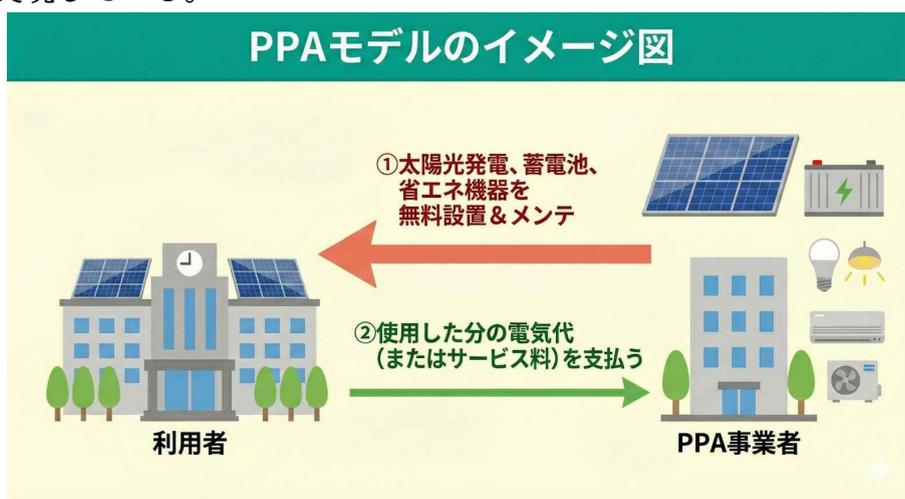
※(株)北九州パワー（地域新電力）

→北九州市唯一の自治体新電力として
2015年12月に設立された。



イ 第三者所有方式（PPA）による太陽光発電・省エネ機器等の導入

PPAによる自家消費型PV・EV/蓄電池の設置や省エネ機器の導入により、再エネ導入量を増加させながら省エネを推進し、脱炭素化を実現している。



中村 たけし 委員



森 基誉則 委員

ウ 民間企業への普及に向けた取組（脱炭素電力認定制度）

脱炭素に関心の高い市内企業を応援することを目的としたもので、再エネ100%電力をはじめとする脱炭素電力を導入した市内企業を市が認定している。これにより、本モデルを活用した脱炭素への流れを市内企業にも普及し、加速させることを目指している。

<委員からの主な質問と回答>

Q：北九州パワーが電気を運ぶ際に利用している送電線はどこから提供されているのか。

A：北九州パワーは地域電力の小売会社であり、自社では発電設備や送電線は保有していない。電気を送る際は、九州電力送配電株式会社の配電網を利用している。

Q：市民が水素エネルギーなどの脱炭素の取組を肌感覚で理解できるよう、北九州市で取り組んでいる市民啓発や体験の機会をどのように設けているのか。

A：市民の皆様にご覧いただくための「エコツアー」のようなコースを設けている。来年4月には、水素関連の実証施設が運転を開始する予定であり、現在も建設中の現場を見学できる機会を設けるなど、市民にPRする場を積極的に提供している。

北九州市としても市民啓発と市民の理解が最も重要であると認識しており、今後も力を入れて取り組んでいく方針。

熊 本 市

【ウォーカーシティの推進について】

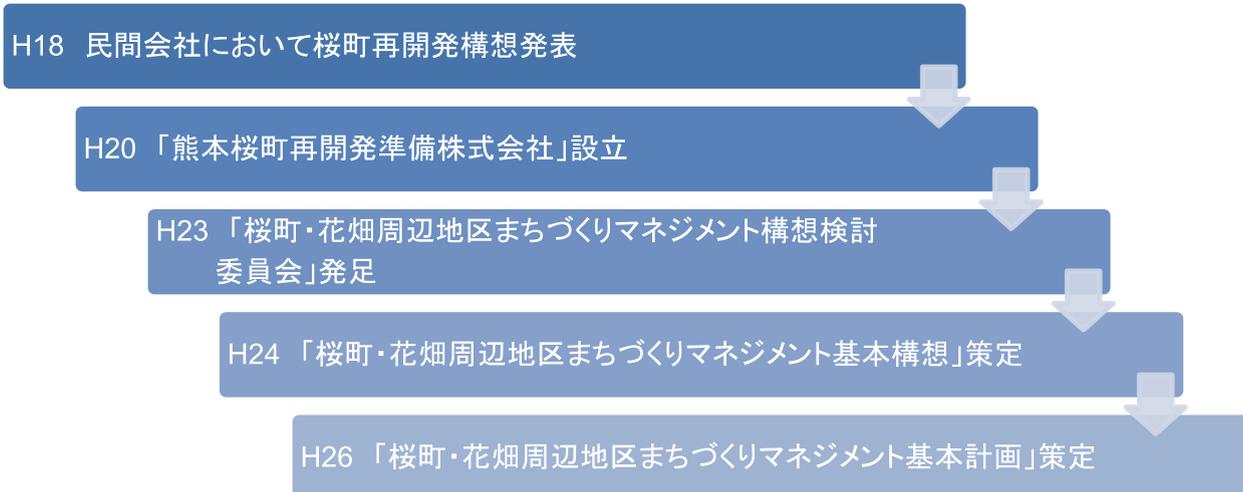
1 花畑広場について

(1) 桜町・花畑周辺地区の整備について

ア 背景

桜町・花畑周辺地区はバスターミナルや百貨店、ホテルなどが集約された核となる地域であった。しかし、老朽化やバリアフリー対応の不十分による拠点機能の低下、歩行者通行量の減少等が課題となっていた。そこで、公共交通と連携したコンパクトシティの形成、中心市街地の拠点性と回遊性の向上を目指し、再整備されることとなった。

イ 沿革



(2) 概要

- ・花畑広場：シンボルプロムナード・旧花畑広場・花畑公園・辛島公園の愛称
- ・面積：約1.5ha
- ・整備費：約23.7億円
 - ・都市再生整備計画事業
 - ・まちなかウォーカー推進事業
 - ・都市構造再編集中支援事業
- ・整備期間：R2.1～R3.11（R3.11.13全面供用開始）
- ・管理方法：指定管理制度（指定管理者 熊本城ホール運営共同事業体）



(3) 整備内容

- ##### ア シンボルプロムナード・旧花畑広場（約8,900㎡）
- ・4車線の市道（幅27m、全長230m）を廃止して、歩行者専用空間として整備
 - ・熊本城と空間的な一体性を感じられ、開放的で憩える空間となるよう、植栽帯やベンチの配置
 - ・人工芝等を配置し、多様なアクティビティが可能となる、にぎわいあふれる空間を創出。



丸山 秀樹 委員



熊 本 市

イ 花畑公園（約2,500㎡）

- ・既存の記念碑や工作物を可能な限り集約し、周囲との視線・動線の連続性を確保。
- ・市指定天然記念物の大クス（樹齢700年）を中心に、明るい緑陰の中で歴史を感じることができる空間とした。



ウ 辛島公園（約3,400㎡）

- ・石張りを撤去し植栽等による緑量を増加させ、涼しく快適にくつろげる空間を創出。
- ・子ども等が遊び場として楽しめる親水施設（ポップジェット）の設置。
- ・子どもが遊ぶ様子を安心して見守れるように、公園中央を取り囲むベンチを設置。



(4) 広場の利活用について

ア 花畑広場まちづくりプロジェクト

広場の近隣高校（熊本県立第一高等学校）と協働した取組として、高校生が広場を”楽しく”・”安心して”使うリーダーになることにより、特に10～20代の若い世代向けに、花畑広場の利活用促進及びイメージ向上を図るもの。

【取組事例】



坂元 みちたか 委員



成田 祐樹 委員

熊 本 市

イ 広間る

有志が集まり、花畑広場について議論や情報共有を行うことで、広場を使うきっかけを作る活動。

令和5年度までは市が主体的に実施していたが、令和6年からは学生が主体となって運営している。

【イベントの様子】



(5) 視察調査

上記の説明聴取の後、広場内の視察聴取を行った。

